様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：１３１０３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１７３４１

研究課題名（和文）学校における「一人職」の学びの特質と影響要因に関する研究：養護教諭に焦点を当てて

研究課題名（英文）The work-related learning at workplace and its factors: focusing on Yogo teacher

研究代表者
留目　宏美（TODOME, Hiromi）

上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：２０５１６９１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、校内連携プロセスにおける養護教諭の学びの特徴を明らかにすることである。482名の養護教諭から協力を得た質問紙回答データ、19名の養護教諭から協力を得た聞き取り調査データを量的・質的に分析した。結果として、養護教諭は発信者の側に位置し、紙面、会議、対話からなる３つのコミュニケーション・パターンを通して、「交渉」的に参加していた。とくに対話が生み出される場合、養護教諭は教師との共通・結節点を探り、アイデンティティを問い直す省察的な学びを経験していた。校内のコミュニケーション・システムが主要な影響要因であったことから、役割、専門性の異なる教職員間の対話を生み出す場づくりが重要である。

研究成果の概要（英文）：This study was undertaken to elucidate the characteristics of learning at workplace which focusing on Yogo teachers(YT:Japan'school nurses). Among them, the learning of cooperation process with other staff (teachers) especially was pay attention.Paticipants were 482 YT (questionnaires)and 19 YT(Semi-structured interviews).As a result,YT is located on the side sending the information and had participated in the staff community with the attitude of "negotiations". Specific communication patterns was paper, meeting, dialogue.In particular, Dialogue is self-reflection,explores the common and tubercular points of oneself and others, it was to come to terms.Communication system among staff in school was main factor affecting the learning of YT.It's important to create a dialogue of different staffs each other of the role and the speciality at school.

研究分野：学校経営学

キーワード：養護教諭　異職種間学習　参加　交渉　対話　省察　実践コミュニティ　社会文化アプローチ

１．研究開始当初の背景

諸環境の変化に直面する現代の学校は、教職員個々人や集団、組織としての力量を高め、教育活動の質を担保することが重要である。しかし、学校現場における教職員の力量形成・向上、成長や学習にかかわる諸先行研究[1,2]は管見の限り、職種の同質性が基本であり、教師をターゲットにした授業研究が中核に据えられている。構成員性の観点、内容・方法の観点から、多様性が踏まえられているとは言い難く、「一人職」が力量を形成・向上する中心的な場は学校現場の外[3]にあるとされている。

1990年代後半以降、生徒指導、生活指導の面から役割の捉え直しが図られた養護教諭は、教師と密接にかかわり、一体的な活動を展開することが期待されている。「第6次公立義務教育諸学校教職員定数改善計画」及び「第５次公立高等学校教職員定数改善計画」の実施（1993～1998年）により、一部、複数配置校もあるが、養護教諭は基本「一人職」である。これより、管理職や教師と養護教諭の日常の関わり合い、連携のプロセスには学びが生起しており、異職種間の学習が成り立っている可能性がある。

２．研究の目的

そこで、本研究では、管理職や教師との日常の関わり合い、連携のプロセスにおける養護教諭の学びの実態を明らかにし、諸課題を考察することを目的とする。

養護教諭の学びの実態を構造的に捉えるための主な視点は、次の３点である。

視点１：養護教諭は管理職や教師との関わりや連携のプロセスにおいて、いかなる学びを現出させているのか

視点２：他の教職員との関わりや連携のプロセスにおける養護教諭の学びはいかなる要因の影響を受けるのか

視点３：養護教諭の学びはいかなる影響、帰結をもたらすのか

近年、注目される「チーム」概念において、学習は欠かせない一要素である[4]。多職種構成組織としての学校において、異なる職種の関係をいかにつなぎ合わせ、各役割・専門性の組織的統合を図るのかを検討する必要がある。本研究は、学習という観点からこの検討を試みる。

３．研究の方法

（1）研究課題１（平成27年度）

第一の課題は、学校現場における養護教諭の学びについて探索的に把握することである。課題達成の方法は、養護教諭を中心に、教師（一人配置の教師を含む）や学校職員、近接領域である対人支援職の力量向上、成長、学習に関する議論・研究動向を整理、分析すること、養護教諭を対象にした予備調査を実施・分析することである。予備調査は、ベテラン養護教諭等を作為抽出し、同意の得られた者を対象にする。

（2）課題課題２（平成28年度）

第二の課題は、学校現場における養護教諭の学びの実態について、統計学的見地から一般的傾向を明らかにすることである。課題達成の方法は、養護教諭の養成機関を複数持ち、特徴的な現職研修等が制度化されている３つの自治体に所在する小・中学校および高等学校に勤務する養護教諭を対象にしたアンケート調査を実施・分析することである。アンケート調査は、郵送法による無記名式自記式質問紙（研究課題１の結果を踏まえ作成）を用いる。

（3）研究課題３・４（平成 29 年度）

第三の課題は、養護教諭と他の教職員の関わり合い、連携のプロセスにおける学びの内実を明らかにすることである。課題達成の方法は、研究課題２のアンケート調査の回答に

特徴がみられる事例を作為抽出した事例研究を実施・分析することである。

第四の課題は、３年間の研究過程で明らかになった各種結果を踏まえ、全体総括を行い、諸課題を考察することである。

４．研究成果

(1)「交渉」として参加する養護教諭

「一人職」が力量を形成・向上する中心的な場は、学校現場の外に位置づけられている。他方、学校という場は実践現場として対置されている。こうした「学校内／学校外」＝「学習／実践」という二区分論に立脚することは適切ではない。

社会文化アプローチにもとづく学習論[5]によれば、「学習環境としての働く場」（workplace as learning environments）という視点から、働く者の、現場における学習への主体的な関与のあり方を論点に据えている。こうした「労働実践への参加＝学習」という見方に則るならば、従前の二区分論を乗り越え、両者を統合的に理解することが可能になる。そこで、「労働実践への参加＝学習」という観点から、学校現場における学びの実態を試案的に整理した（**図１**）。

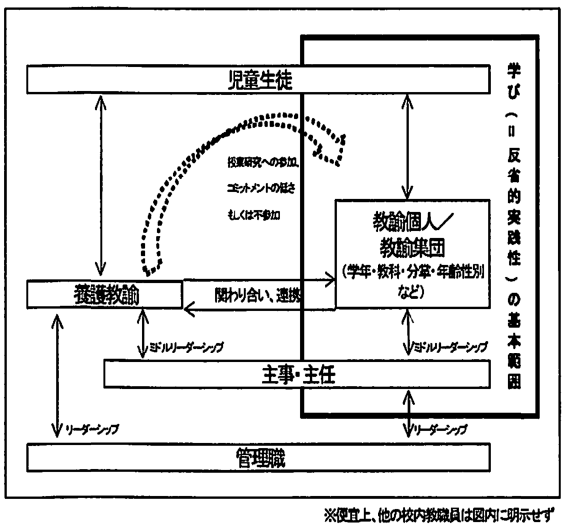

図１　学校現場における学びの基本構図

教師は、児童生徒に対する教育指導、授業のあり方について、個人・集団的に省察する機会・場を学校現場に持つ。トップ・ミドルリーダーの影響力も作用し、学校組織力の向上や学校組織開発[6]といった動態が生み出される。授業研究の場に、独自の役割を付与された養護教諭が参加し、省察し合う相互関係が構築されているケース[7]がある。ただし、そうしたケースは一般化できるものではなく、養護教諭がフィードバックを得ながら、活動を振り返る機会は少ない[8]。

予備調査によれば、養護教諭にとって、管理職や他の教職員との相互関係は「省察」よりも「交渉」の側面が大きかった。具体的には、保健の視点や保健室で入手した情報を表明、主張、提供し、学校教育活動、個別支援に組み込む「交渉」過程である。これより、養護教諭にとって、学校という労働実践の場への参加は「交渉」過程としての参加、関係づくりの側面が大きいことが示唆された。なお、学校文化への養護教諭の同化[9]の実情を勘案すると、「交渉」の成否（共生／同化）がアイデンティティを分化させる可能性がある。

(2) ３つのコミュニケーション・パターン（紙面・会議・対話）と、対話－意思疎通－省察の関連性

2016年12月から2017年２月にかけて、アンケート調査を実施した。482名の養護教諭から協力を得た（回答率25.4%）。

９割の養護教諭が重視している「交渉」機会は、確実性、残存性という理由から「表簿」（保健日誌）であった。次いで、詳細な情報提供や関連情報の取得、話し合いへの発展性という理由で、７割の養護教諭が「会議」を重視していた。5割の養護教諭は「資料配布」も活用していた。これより、公的に制度化された「交渉」機会を通して、管理職や教師集団への参加を講じていることが示唆された。「交渉」内容は大きく、保健・安全活動、気になる児童生徒の情報に区分され、とくに後

者については複数の機会を活用し、伝達に努めていた。

十分な意思疎通につながるための要因は、大きく２つあった。第一に、職員室での養護教諭の活動時間が長いことである。これにより、管理職や教師との「日常の談話や相談等」が増え、十分な意思疎通につながっていると認識されていた。第二に、担外・級外職員も含め、校内教職員全体を俯瞰した学校経営の推進である。具体的には、学校経営ビジョンや学校課題が明確である、保健室情報や養護教諭の見立てが重視される、養護教諭への一任傾向が低い、双方向の情報ネットワークが確立している等である。また他の教職員を育て支えるサポーティブな文化も重要であった。

３割の養護教諭は管理職や教師との「日常の談話や相談等」を通して「役割期待の探求・役割の解釈」「職務の振り返り」「信念（観）の意識化・見直し」等を行っていた。これより、対話－意思疎通－省察には、関連性がみいだされた。

なお、同職種間（他校の養護教諭）でしか学べない事柄は「保健室運営術」であった。また８割の養護教諭は、校内管理職や教師は「利害関係者である」等の理由で「養護教諭ならではの感情の揺れ動きを語り合えるのは、養護教諭同士だけ」であると認識していた。学校現場で養護教諭のナラティブが真に成立することの困難性がうかがえる。

（3）対話－意思疎通－省察の促進要因：事例研究から

2017年６月から2018年３月にかけて、インタビュー調査を実施した。19名の養護教諭から協力を得た。

対話－意思疎通－省察が促進されるためには、主に２点が要点であった。第一に、養護教諭が「情報」のハブになることである。養護教諭が児童生徒の情報・見立て・対応・変化にかかわる「保健室情報」を記録に残し、可視化・共有できる媒体として蓄積・上書きしていることや、学級・学年を支援するという意識を明確に持ち、保健室で「待つ」だけでなく、養護教諭が活発にアウトリーチを展開していることが重要であった。これによって、管理職や教師－養護教諭のコミュニケーションが複線・双方向型のルートとして構築され、相互の役割期待・役割関係を明らかにすることのできる対話－意思疎通－省察を促進することを可能にしていた。第二に、「問い」が内在された対話である。管理職や教師がそうした対話を行っていること、養護教諭にも「問い」を投げかけることによって、養護教諭は信念（観）を洗練させることの重要性について理解を深めたり、状況分析をしたり、思考・行動様式の問い直しにつながっていた。

（4）全体総括

養護教諭は発信者として、学校現場に「交渉」的に参加する。だが、養護教諭自身による「保健室情報」の蓄積や積極的なアウトリーチ、「深い対話」関係等の影響により、コミュニケーション・パターンが深化する。このことによって、養護教諭は自文化を問い直しながら、他者との結節点を探る異職種間学習を行い、学校組織の一員として／養護教諭として、アイデンティティを確立していた。

＜引用文献＞

1）浅田匡、生田孝至、藤岡完治、成長する教師－教師学への誘い－、金子書房、2012
2）藤原顕、木原成一郎、松崎正治、他、学びのための教師論、勁草書房、2007
3）小高さほみ、教師の成長と実践コミュニティ－高校教師のアイデンティティの変容、風間書房、2010
4）エイミー・C・エドモンドソン、野津智子訳、チームが機能するとはどういうこと

か、英治出版、2014

5）高橋満、槙石多希子、対人支援職者の専門性と学びの空間－看護・福祉・教育職の実践コミュニティー、創風社、2015

6）佐古秀一、第10章　学校組織開発、スクールマネジメント－新しい学校経営の方法と実践－、ミネルヴァ出版、2008、155－175

7）大瀬敏昭、学校を変える－浜之郷小学校の５年間、小学館

8）山本浩子、養護教諭の実践に対する評価－自己評価能力に影響を与える要因－、学校保健研究、46、2004、292－301

9）すぎむらなおみ、養護教諭の社会学－学校文化・ジェンダー・同化、名古屋大学出版会、2014

５．主な発表論文等

[雑誌論文]（計４件）

① 留目宏美、養護教諭の生徒指導参加をめぐる課題に関する考察－生徒指導における養護教諭の役割についての政策文書の分析を中心に－、学校経営学論集、査読有、第６号、2018、11－20

② 留目宏美、養護教諭の役割期待の変容と組織参加の形態－1990年代以降の学校組織と養護教諭の関係再編の指向性－、学校経営研究、査読有、42巻１号、2017、48－69

③ 留目宏美、学校経営における「養護教諭マネジメント」と校種・校長の影響、学校保健研究、査読有、57巻１号、2016、29－40

④ 留目宏美、「チーム医療」政策の動向と課題についての一考察－医療従事者等の関係性に着目して－、学校経営学論集、査読有、第４号、2016、1－10

[学会発表]（計３件）

① 留目宏美、高等学校における養護教諭活用過程とその影響－事例分析を通して－、日本教育経営学会第56回大会、2016年6月

② 小河原慶子、留目宏美、養護教諭の健康相談に関する経験学習の実態－ライフラインメソッドを用いたインタビュー調査を通して－、日本学校健康相談学会第13回学術集会、2017年３月

③ 留目宏美、学校組織内部における教職員間のコミュニケーションの実態と課題－養護教諭を対象とした質問紙調査の分析結果から－、日本教育経営学会第57回大会、2017年6月

[図書]（計１件）

① 留目宏美　他、教育開発研究所、「チーム学校」まるわかりガイドブック、2017、４

[その他]（計２件）

① 留目宏美、伝達から共有へ－コミュニケーションの基本的な考え方－、神奈川県足柄郡小学校教育研究会養護部会研修会（招待講演・演習）2017年８月

② 留目宏美、知識、思考、情動、行動から探る養護教諭の専門性、長岡支部合同グループ研修会（招待講演・演習）2017年10月

６．研究組織

（1）研究代表者

留目　宏美（TODOME, Hiromi）

上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：２０５１６９１８

（2）研究協力者

小河原　慶子（OGAWARA, Keiko）